

<p>学校教育目標 Aよく考える子 B思いやりのある子 C健康な子 Dすすんでやり抜く子</p>				
<p>目指す学校像(ビジョン)</p> <p>【目指す学校像】子どもたち一人一人が安全・安心に学ぶことのできる学校</p> <p>【目指す児童像】A 課題を見いだし解決する力を身に付け、深く考えることができる児童 B 自他を尊重し、共生の意識をもつことができる児童 C 規則正しく生活し、心と体を健康に保つことができる児童 D 他者と協働しながら自立的に学び続ける児童</p> <p>【目指す教師像】子どもの学びを支えるプロとして、日々自分自身を高めるとともに組織の一員としての自覚をもち、他者と協働する教師</p>				
<p>前年度までの学校経営上の成果と課題</p> <p>【成果】学校経営方針である「安全・安心」を軸に、教育課程を刷新することをとおして、地域・保護者と連携・協働してよりよい学校をつくる関係が構築できた。</p> <p>【課題】大規模校のメリット・デメリットを整理し、地域・保護者とともに本校の特色を踏まえた教育活動の充実を図ること。</p>				
領域	具体的方策	分析・改善方策	学校関係者評価	次年度の重点・方針
A 確かな 学力	①学校スタンダードを活用した教員間の共通理解の徹底/ねらいを明確にし、ねらいに応じた学習内容と振り返りのある授業の徹底	①全教員が肯定的回答をした。子どもたち自身の肯定的な回答も95.6%だった。また約83%の保護者が、子どもの学習について基礎・基本が定着していると回答した。保護者より、子どもの理解が不十分な場合の手だてを求める意見が寄せられた。デジタルドリルの利活用等、個別最適な学習環境を構築していく。	①基礎・基本の定着について、教員と保護者の肯定的回答率の差に着目したい。教員は児童に確かな学力を付けさせる授業は当然のこととして実施している。児童の学習理解状況の共有が必要か。ポートフォリオ等の導入や、デジタルドリル等の取組状況の見える化等実施してはどうか。	①ICTを活用した授業改善を推進することを前提として、家庭学習におけるタブレット端末の活用を進めるとともに、保護者と学習面の成果や課題を、個人面談等を通じて丁寧で共有する。
	②個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた校内ICT研修を通じた教員の機器操作の習得等	②ICT機器の活用について約88%の教員は肯定的回答をした。次年度より本格的に運用する新しい教育ソフトの活用について、今年度末に研修を実施し次年度に備える。家庭におけるタブレット端末等の活用について、約48%の保護者が肯定的回答をした。本校の実態に合わせて改訂したタブレットルールについて、学校と家庭が連携してきまりを守り端末を正しく使う環境をつくる。またデジタルドリル等の利活用について教員のスキルを向上させるとともに、家庭への周知を行う。	②教員の指導の下児童は学習のツールとしてタブレット端末を利活用している。しかし、保護者はその状況を把握することは難しいのではないかと。ゆえに子どもの家庭内でのタブレット端末活用状況を踏まえ、家庭のルールとして端末の使用を禁止する状況は理解できる。一方で、例えば家庭におけるデジタルドリルの活用は、個別最適な学習を保証するツールともなり得る。学校便り等とおして、課題の共有を図るとともに、家庭の理解を得たい。	②上記①とともに、情報モラルやリテラシーを身に付ける手だてを保護者と連携して取り組む。そのために、学校の取組や課題を共有するとともに、発達段階に応じた意図的な情報モラル・リテラシー教育を推進する。
	③昨年度の研究指定校としての取組の継続、地域コーディネーターの活用	③教材、地域人材のデータベースの活用について約65%の教員が肯定的回答をした。取組の結果85%の児童が総合的な学習の時間の学びを通して「何ができるようになったのか」を実感したと肯定的回答をした。	③地域コーディネーターの活用率が65%に留まるのは、教員が直接地域等と話した方が早く決まるからではないか。しかし、本校の西東京ふるさと探究学習の指導計画は、数年にわたり地域を開拓したことを基に作成されている。本校に新たに赴任した教員にとって、探求学習の実情を熟知しているコーディネーターの存在はとても大きい。教員とコーディネーター間での連絡・調整を丁寧に行い、更なる活用をおしてより充実した学習を実施してほしい。	③引き続き西東京ふるさと探究学習における地域コーディネーターの活用を進めるとともに、学校行事や朝遊びなど地域人材が必要な場面での調整役を担ってもらうなど活躍の場を広げていきたい。
B 豊かな 人間性	④一人一人の役割や活躍の場を保障し、日々培った力を発揮させる運動会、音楽会の実施等	④約97%の教員が、児童主体の活動となるよう指導を行っていると回答した。また、約96%の保護者が、子どもが学校行事等に対し意欲的に取り組んでいると回答した。児童の活躍の場をより多くの保護者・地域の皆様にご覧いただけるよう、日程等の周知をさらに早く行う。	④コロナ禍前に行われた行事が復活したことがとてもよかった。子どもの家で練習する姿や会話より、行事等を楽しみにしている様子が伝わった。より一層地域に呼びかけ子どもたちの取り組む姿を公開し、地域との関わりの場を増やしてほしい。	④肯定的な回答は学校行事への子どもたちや保護者の期待の表れである。今後も学校行事を子どもたちの成長の機会として大切にしていきたい。そのためにも、保護者アンケートでいただいた様々な意見を有効活用していきたい。

C 総合的な体力	⑤朝及び放課後の遊び場開放、休み時間における校庭及び体育館遊びの時間設定、運動遊びをしたくなる環境整備による運動機会の確保/養護教諭や栄養士と連携した保健指導の工夫	⑤約75%の児童が休み時間に外遊びをしていると回答した。また、約97%の教員が養護教諭や栄養士と連携した保健指導を行っているという回答した。総合的な体力の土台となる規則正しい生活について、「寝る時間が遅い」等保護者より意見が寄せられた。「生活見直しカード」等のツールをきっかけに、家庭と連携して取り組む。	⑤一人でも多くの子どもたちが外遊びをできるよう、教員による声掛けをこれからも大切にしていきたい。一方で、図書室等で本を読みたいという子どもたちの思いも大切にしていきたい。今年度より実施している朝遊びについて、ボランティアとして教育実習を終えた学生に依頼している点が良い。持続可能な取組となるよう、ボランティアの確保を考えたい。地域やおやじの会に声をかけてはどうだろうか。	⑤体育授業での運動量確保、縄跳び旬間など体育的活動の工夫、朝遊び、休み時間等外遊びができる機会の確保など、現在の環境でできる運動機会の創出を確実にやっていく。加えて、地域の力を借りた取組を学校運営協議会やPTAと連携して検討する。
D 健全育成・いじめ防止	⑥課題を迅速に把握し、早期に組織対応するための報連相の徹底、多角的な視点で課題解決に努める校内委員会の工夫改善、様々な問題に適切に組織対応するための危機管理マニュアル作成等  ⑦学校評価アンケートを核とした、保護者・地域と共有した目標に向かって、対等な立場の下で共に活動する協働関係の構築/外部人材の積極的活用/学校運営協議会の適切な運営及び推進、保護者・地域との連携をよりよくするためのPTAの在り方検討等	⑥全教員が、課題の早期発見、報告相談、組織的対応を行っているという回答した。いじめについて、約98%の児童がどんなことがあってもいけないと回答した。安全・安心な学校生活について、約94%の保護者が肯定的回答をした。  ⑦約87%の保護者が、本校の子どもたちのよさや課題、教育活動のねらい等を地域・保護者と共有して教育活動を行っているという回答した。今年度より、保護者・地域の方が学校に対して気付きや意見を伝えやすいよう、保護者・地域の方が参画した教育活動後に、短時間でとれるオンラインのアンケートを実施した。しかし学校評価アンケートの回答率は37.8%であった。保護者・地域から寄せられた意見を参考に教育活動の見直し・改善を図るとともに、その取組を周知することにより、学校アンケートの参加を通して保護者・地域との連携をより良くしていく。	⑥児童アンケートにおいて、「いじめはどんなことがあってもいけない」の設問に対し否定的回答をした児童について、教職員で共有を図っていると知り安心した。一方で、いじめ等の人権課題について、全ての教職員が肯定的評価を自信をもってつけることができるよう、「初期対応の迅速さ」や「情報共有の徹底」という具体的な取組をさらに充実させる必要があると考える。また、起こり得るすべての危機対応を充実させ、「想定外」が起こらないように備えることも重要である。「危機管理マニュアル」のアップデートを図ることが求められる。  ⑦地域人材の活用の際し、謝礼等の経費をむこさばカンパニー（PTA）の会費から拠出した。子どもたちの学びにつながることに会費が使われることはとてもよい。西東京ボランティアセンターの活用も検討するとよい。「人材バンク」という形で登録リストをより充実させていくことも有効である。	⑥いじめを否定する児童の割合が100%に近付いたことは、日々の取組（未然防止、早期対応、報連相の徹底）の成果である。引き続き、安全・安心な学校づくりに向けて、組織的な取組を充実させる。  ⑦オンラインのアンケートを通じて、保護者と双方向の関係づくりを継続するとともに、より保護者がリアルな場で学校等の取組に参画しやすくする工夫に取り組む。現段階では、体力テストの計測の手伝いを募る予定である。
E 業務改善・働き方改革	⑧学年会を定期的に開催し、教材研究を教員間で協働して取り組み、授業の質の向上と教材研究の効率化を図る。/学年内で教科担当を決めるとともに交換授業やローテーション授業を取り入れるなど、各教員のもっている指導力を学級の枠を超えて、できるだけ多くの児童に還元する。	⑧全教員が、学年会を通して授業の質の向上と教材研究の効率化を図っていると回答した。交換授業等の実施について、肯定的回答は約63%だった。実施した教員より「交換授業等により多くの子どもたちの実態を把握することができた。」との意見が寄せられた。授業時間の調整等必要ではあるが、児童のために組織的取組を継続する。	⑧「働き方改革」ではあるが、子どものためという視点は今後大切にしたい。交換授業（ローテーション授業）や教科担任制については、教育のプロではない一般の保護者・地域の方からするとなじみが薄いように思う。もう少し情報発信してもよいのではないか。学級や学年の枠を超えての指導は子どもたちにとって刺激となりよい学びにつながると思われる。今後もスタッフが多いことを強みとし、学校全体で組織的な取組を継続していきたい。	⑧各学年4学級以上の大規模校であるため、引き続き役割分担や教材研究の共有等を行い、業務の重なりをなくしていく。教科担任制の趣旨を踏まえた、交換授業等については、子どもたちの実態や教員の専門性等を踏まえて、柔軟かつ積極的に取り組む。